

# 長期化するキャンプ生活の中で ミャンマー・タイ国境地帯に生きる難民を訪ねて



パントラクター・キャンプ UNHCR協会 / 奥平章子



1970年代後半にインドシナ半島の政変により大量に流出した、いわゆる「ボートピープル」と呼ばれる人々を含む問題が「一応の」解決を見せて以来、アジアにおける難民の現状についてメディアなどで取り上げられる機会は極めて少なくなりました。しかし、タイのミャンマー難民をはじめ、バングラディシュのミャンマー難民、ネパールのブータン難民、スリランカの国内避難民など、「忘れられつつある」アジアの難民・避難民の問題が、各地で依然として続いています。

2005年7月上旬、私はミャンマーとタイ国境沿いの難民キャンプを訪れました。現在、タイには、ミャンマーとの国境の山岳地帯に計9つの難民キャンプが設置され、12万人以上の難民が暮らしています。多民族国家ミャンマーから逃れてきたカレン族が7つのキャンプの、そしてカレンニー族が2つのキャンプの大多数を占めています。タイのUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は、バンコクにある地域事務所(ユニエシイショナル)の他、メーホソン、メソット、カンチャナブリの3カ所にフィールド事務所を構え、現地政府やNGO(非政府組織)との連携や調整を図りながら支援活動を展開しています。

今回私は、9つのキャンプの中でも最北部に位置するパントラクター・



メラウ・キャンプの図書館にて UNHCR協会 / 奥平章子

キャンプ、そして北西部に位置するメラウ・キャンプの2カ所を訪問しました。いずれも、メーホソン県にあります。パントラクター・キャンプは、1996年に正式に開設され、カレンニー族が約1万8000人暮らしています。現地の風土に合わせ、竹で作られた高床式の家が軒を連ね、10年近くの歳月をかけて整えられたキャンプ内の生活基盤は、地元NGOはじめ各支援機関の努力の結晶のように思われました。キャンプ内は、カレンニー難民委員会を筆頭に組織化されており、一つの社会が形成されていました。

学校は、保育園が8つ、小学校が9つ、中学校が4つ、高校が2つあり、さらに、高校を終えた人のための専門学校や職業訓練所なども自主運営されていました。キャンプ内の教育は、カレンニー教育省と教育分野のNGOとの連携により監督されています。一見すると、平和な村落のようにも見えました。

しかし、キャンプに暮らす人々と話をする中で、今最も必要としているものをきいたところ、水や食糧を挙げた人は一人もなく、彼らの口々からこぼれ落ちる共通の言葉がありました。それは、「将来への希望」「夢」そして「自由」というものでした。長期化するキャンプ生活の中で、生活に必要な物資が整えられていく一方で、日々失われていくものがあることを知りました。それは、ともすれば人間が生きていくうえで最も基本的かつ大切なものかもしれません。

パントラクター・キャンプから南へ車で3時間ほど下ったところに、メーサリアンという町があります。そこからさらに、でこぼこの山道を行くこと3時間、ミャンマーとタイを隔てるサルウィーン川を横目に見ながら、メラウ・キャンプにたどり着きます。前の晩に降った雨の影響で、キャンプへと続く山間部の険しい泥道がぬかるみを増していました。

国境から約3kmの位置にあるメラウ・キャンプは、山林の急斜面に沿って開設された地理的環境の非常に厳しい立地条件の中にありました。ここには、カレン族が大多数を占める難民約1万7000人が

住んでいます。約1年半前に、近隣のキャンプが洪水災害に遭い、そのためここに移動しました。避難してきたとはいえ、土砂災害などが心配されます。

このキャンプには、UNHCRのパートナーである日本のNGO、社団法人シャントイ国際ボランティア会(SVA)の活動する図書館が設置されていました。ちょうど小学校の隣りに建てられている図書館で、授業を終えた子どもたちが次々とやって来て、あっという間に室内を埋め尽くしました。託児所のような機能をも果す図書館で、図書館員の読み聞かせやゲームに参加する子どもたちの姿は実に楽しそうでした。また、英語、タイ語、日本語などからカレン語、ビルマ語に翻訳された本がところ狭しと並べられており、それらの本に飛びつく子どもたちの姿、夢中になって見入る姿は、「自由」のない生活の中で、「夢」と「希望」を与える「知識」に飢えた子どもたちの現状を物語っており、鮮烈な印象となりました。

2つの難民キャンプの委員長や学校の先生は、帰れる時機が来たらもちろん故郷に帰りたいが、それが許されない今、キャンプに暮らす人々の将来に希望の光を灯すことのできるもの、それは、子どもたちの教育であると口々に語っていました。長期化するキャンプでの生活は、いわゆる「緊急事態」と呼ばれる状況とは質の異なる問題を多分に抱えており、長期化すればするほど深刻さを増しています。アジアに暮らす難民の人々の苦難を少しでも和らげ、彼らに生きがいをもたらす将来への希望につなげていくため、同じアジアに住む日本の私たちが、この地域の人々の未来づくりに対してできることは、まだまだたくさんあります。

認定NPO法人 日本UNHCR協会  
[ 国連難民高等弁務官事務所(UNHCR 国内委員会) ]  
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70  
UNハウス(国連大学ビル)6階 UNHCR内  
TEL: 03-3499-2450 FAX: 03-3499-2273  
Eメール: info@japanforunhcr.org  
ホームページ: <http://www.japanforunhcr.org>

「With you」No.6 2005年 第3号(9月)  
発行人: 赤野間征盛  
編集: 榎川勝也、中村恵、井上清治、奥平章子  
デザイン・製作: 榎ポイントライン